

〈形容詞句+繫辞+主語〉型の倒置構文

平塚 徹

1. はじめに

本稿は、〈形容詞句+繫辞+主語〉型の倒置構文のうち、(1a)のように量表現を含むものと、(1b)のように比較級を含むものを対象とする¹⁾。

- (1) a. *Nombreux sont les mammifères qui hibernent, surtout parmi les rongeurs: marmottes, loirs, hamsters, ...*
(*Science illustrée*, février 1993, p. 8)
- b. *Plus toxique encore est la vitamine D, dite "antirachitique".*
(*id.*, mai 1993, p. 5)

前者を第二節で、後者を第三節で扱い、これらの倒置構文が主語の指示対象を談話内世界に導入していることを主張する。

2. 量表現を含む倒置

この倒置に現われる主な形容詞は、*nombreux*, *rare*, *grand* である。

- (2) a. *Rares furent ceux qui furent admis à l'admirer.*
(SIMENON, *Les 13 mystères*, p. 124)
- b. *Grande est mon admiration pour ce volume si intéressant.*
(cité dans BLINKENBERG, p. 42)

BLINKENBERG (1928, p. 42) や LE BIDOIS (1952, p. 179) は、これらの形容詞を含む倒置を、情意的要因によるものとみなしている²⁾。これに対して JONARE (1976, p. 93) はこれらの形容詞にはもはや情意的価値は無いと考えている。本節では、問題の倒置構文は、情意的要因ではなく、談話機能的要因によるものであることを主張する。

さて、BLINKENBERG (pp. 43-44) によると、(3a) は (3b) のように言い換えられる。

- (3) a. *Nombreux sont les lecteurs qui nous ont demandé de poursuivre notre enquête.*
- b. *De nombreux lecteurs nous ont demandé de poursuivre notre enquête.*

(3b)は、特定の読者について、彼らは何をしたかを述べる文ではない。むしろ、この文が発話されて、始めて、そのような読者がいたことが分かる。よって、(3a)も、主語の指示対象の存在を述べていると考えられる。このことは、属詞が量表現の場合に成り立つ。例えば、(4)に比べて、(5)では、aとbの意味がかなり異なっている。

- (4) a. *Nombreux* sont les enfants qui croient au Père Noël.
- b. De nombreux enfants croient au Père Noël.
- (5) a. *Heureux* sont les enfants qui croient au Père Noël.
- b. {Les/Des} enfants heureux croient au Père Noël.

(5a)では、サンタクロースを信じる子供の集合が幸福な者の集合に含まれる。それに対して、(5b)では、定冠詞の場合、幸福な子供の集合がサンタクロースを信じる者の集合に含まれ、不定冠詞の場合、いずれの含意関係も導き出せない。しかし、(4)においては、このような差は生じない。これは、量表現が、主語の指示対象の属性を述べるより、むしろその存在を述べているためである³⁾。

量に関する述語が、主語の指示対象の存在を述べていると考えられる例が、関係節外置構文でも見られる。主語名詞句からの外置は、一般に、主語の指示対象を談話に導入する場合に可能であり、動詞は存在・出現を表わすものが多い⁴⁾。

- (6) a. En confrontant les différents coefficients, une régularité apparaît qui montre que, [...] (*Sciences humaines* 50, p. 40)
- b. d'autres menaces se *profilent* qui conduisent à élaborer de nouvelles réflexions éthiques: [...] (*id.* 46, p. 17)
- c. Des techniques *sont nées* depuis, qui nous permettent d'éduquer l'audition jusqu'à l'apparition de l'oreille directrice.
(TOMATIS, *L'oreille et le langage*, p. 116)
- d. une voix *s'éleva* qui voulut tout concilier: [...] (*id.*, p. 131)

そして、多いことを意味する動詞 *abonder* も、関係節外置構文に現われうるのである。

- (7) les manuels *abondent* qui en traitent, [...]
(TOMATIS, *L'oreille et le langage*, p. 13)

ここでは、動詞 *abonder* は、量が多いことを述べながらも、主語の指示対象の存在を述べていると考えられる。あるいは、多量に存在していることを述べていると言っても良い。そもそも、「多い」と言うことは、多くの対象が存在していると言うことになり、「少ない」と言うことは、対象があまり存在していないと言うことになる。つまり、量の多寡を述べることは、存在について述べることにきわめて近いのである⁵⁾。

そこで、量表現を含む倒置構文は、主語の指示対象の存在を述べて、それを談話

内世界に導入していると仮定する。この仮定から、この構文が否定できないことが説明できる。

- (8) a. {*Nombreux/Rares*} sont ceux qui suivent le cours de linguistique.
b. *{*Nombreux/Rares*} ne sont pas ceux qui suivent le cours de linguistique.

これを説明するために、典型的な提示構文である転化的非人称構文の否定を見てみる。転化的非人称構文は、(9)のように、否定することができる。

- (9) a. Il passera un train d'ici deux heures. (MARTIN, p. 379)
b. Il ne passera pas de train d'ici deux heures.

しかし、意味上の主語(以下、実主語)が定の場合は、否定することが困難になる。

- (10) a. Il passera le train que tu as déjà pris la semaine dernière.
(MARTIN, p. 380)
b. *Il ne passera pas le train que tu as déjà pris la semaine dernière.

不定の実主語の場合は、否定すると不定冠詞が *de* になることから分かる通り、否定は実主語に掛かっており、そのため、特定の列車への言及がなされていない。しかし、定の場合は、実主語は特定の列車を指示しているため、否定すると、その特定の指示対象に関して、それが存在しない、もしくは出現しないと述べることになる。すると、内容上、(10b)は、実主語を主題とするトピック・コメント構造に傾いてしまい、転化的非人称構文の提示機能と矛盾してしまうため、不自然になる。

同じことが、やはり提示機能を担うと考えられる、一般の動詞による倒置構文にも当てはまる。この場合も、主語が不定ならば、否定は問題ない。

- (11) a. Dans cet immeuble habitent des travailleurs portugais.
b. Dans cet immeuble n'habitent pas {*de/des*} travailleurs portugais.
(東郷・大木, p. 9)

それに対して、主語が定だと、否定の容認度が低下する⁶⁾。

- (12) a. A cette époque-là, sont nées les sciences naturelles.
b. *A cette époque-là, ne sont pas nées les sciences naturelles.⁷⁾

以上のように、提示構文は、特に主語が定の場合、否定すると不自然になる⁸⁾。量表現を含む倒置に話を戻すと、(8a)が提示機能を果たせるのは、述語が、主語の指示対象の存在について断定していて、それ以上の属性をあまり述べていないからである。しかし、(8b)のように否定されると、主語の指示対象について、その量に関する属性を述べることになり、提示機能と矛盾して不自然となる。

本節では、量表現を含む倒置は、形容詞が主語の指示対象の存在について述べているため、主語の指示対象を提示する機能を果たしていることを主張した。

3. 比較級を含む倒置

比較級を含む倒置においては、一般に、比較の対象が先行文脈中であって、接続詞 *que* を伴って明示的に現われないので、属詞は先行文脈との結び付きが強い。本節では、更に、形容詞も先行文脈によってある程度活性度の高くなったものであり(このことは、NORDAHL (1973: p. 119) も指摘している)、問題の倒置構文は、主語の指示対象を談話内世界に導入する機能を果たしていることを主張する。ただし、活性度が高くなるとは、意識にのぼるか、のぼりやすくなることと理解されたい。次の例を見られたい。

- (13) *Les nouveaux pauvres, la nouvelle cuisine, les nouveaux pères, les nouveaux philosophes, tout est nouveau aujourd'hui. Un peu moins nouveaux cependant sont les nouveaux riches, le Nouveau Roman et la Nouvelle Vague.* (YAGUELLO, *En écoutant parler la langue*, p. 80)

この例では、先行文脈に *nouveau* という形容詞が既に現われている。そして、倒置文は、〈*nouveau* + 名詞〉の別の例を追加している。しかし、形容詞は、活性度さえ高くなっていけば、そのままの形で先行文脈に出てきている必要はない。

- (14) *Antoine, évoquant les souvenirs trop vivaces de son passé, connaît à nouveau les tentations démoniaques: des visions de luxe, les séductions du pouvoir ou de la volupté le sollicitent; plus troublante encore est l'apparition de son ancien disciple, Hilarion, qui [...]*

(*Petit Robert 2*, "Tentation de saint Antoine" の項)

悪魔の誘惑と言え、心を乱すものであろうと思われる。たとえ、先行文脈に出てきている誘惑が聖アントワヌの心を乱したかどうか分からないとしても、誘惑と言えどどれだけ心を乱すかという尺度が問題になってくる。よって、形容詞 *troublant* の活性度は高いと考えられる。そして、先行文脈の誘惑に対して、倒置文は、別の誘惑を出してきている。

このように、文頭の形容詞は文脈のせいで活性度が高くなっている。そのため、属詞は、主語の指示対象に関する新しい情報をもたらすのではなく、むしろ、その指示対象を新たに談話内世界に導入するための土台のような役目を果たしている。

この点に関して作例による調査を行った。先ず、モルヒネの毒性の話の後、ヘロインの毒性の話に移行していく場合、(15a)の正置構文も、(15b)の倒置構文も自然である。

- (15) [先行文脈: モルヒネの毒性の話]

La morphine est donc très dangereuse.

a. *Mais, l'héroïne l'est plus: ...*

b. *Mais, plus dangereuse est l'héroïne: ...*

[後行文脈: ヘロインの毒性の話]

しかし、モルヒネとヘロインの毒性の話をした後では、倒置構文は容認度が低下する。

- (16) [先行文脈: モルヒネとヘロインの毒性の話]

La morphine est donc très dangereuse.

- a. Mais, l'héroïne l'est plus.
b. ?# Mais, *plus dangereuse* est l'héroïne.

[テキスト終わり]

次の作例でも、同様の結果を得た⁹⁾。

- (17) [先行文脈: ヘロインの毒性の話]

L'héroïne est donc très dangereuse.

- a. Mais, la cocaïne l'est autant: ...
b. Mais, *aussi dangereuse* est la cocaïne: ...

[後行文脈: コカインの毒性の話]

- (18) [先行文脈: ヘロインとコカインの毒性の話]

L'héroïne est donc très dangereuse.

- a. Mais, la cocaïne l'est autant.
b. ?# Mais, *aussi dangereuse* est la cocaïne.

[テキスト終わり]¹⁰⁾

これに対して、ヘロインからコカインへと話題が移行していく文脈でも、否定文だと容認されない。

- (19) [(17)と同じ文脈]

L'héroïne est donc très dangereuse.

- a. Mais, la cocaïne n'est pas moins dangereuse: ...
b. Mais, la cocaïne ne l'est pas moins: ...
c. *Mais, *moins dangereuse* n'est pas la cocaïne: ...

比較級を含む倒置構文は、主語の指示対象を談話内世界に導入する。よって、これを否定すると、量の表現を含む倒置構文の場合と同様に、提示機能と矛盾し、不自然になる¹¹⁾。

4. 結語

量表現を含む倒置は、量表現自体が主語の指示対象の属性を叙述するより、その存在を述べるために用いることが可能なため、提示表現として機能しうる。また、比較級を含む倒置は、文脈により形容詞の内容の活性度が高くなっているために、主語の指示対象の談話内世界への導入という機能を果たしうるのである。量表現や比較級を含む倒置構文が否定できないことは、転化的非人称構文や一般の動詞を含む倒置文において同様の現象が観察され、提示機能との矛盾から説明される。この

ように、〈形容詞句＋繫辞＋主語〉型の倒置構文も、他の構文と関連させて、談話機能というより大きな観点から捉えることが可能なのである。（京都産業大学）

[注]

1) NORDAHL (1973) の時事文をコーパスとした統計では、〈形容詞句＋繫辞＋主語〉型の倒置構文 106 例のうち、形容詞が nombreux/rare のものが 49 例、比較級のもものが 39 例あり、本稿で対象とする倒置文が多数を占めている。

2) BLINKENBERG (1928), LE BIDOIS (1952), JONARE (1976) の三者とも、属詞が文頭に来る原因の一つとして情意的要因を考えている。他方、SAVELLI et CAPPEAU (1993) は、〈属詞＋繫辞＋主語〉という語順では、属詞は graduable でなければならないことを観察している。例えば、幸福の程度は連続量と考えられるので、heureux は、文頭に來ることが出来るのである。

(a) heureux sont ceux qui ont préparé la visite (p. 73)

また、heureux が、gradable であることは、très や bien 等の程度副詞がつくことからも明らかであるが、このような程度表現を伴った形容詞句も文頭に現われる。

(b) [très/bien] heureux sont ceux qui ont préparé la visite (ibid.)

しかし、SAVELLI et CAPPEAU のように、属詞が graduable でなければならないと言うだけでは不十分である。なぜなら、très や bien 等の程度副詞と異なり、程度が高くないことを表わす un peu, peu, pas は容認度が低下するからである。

(c) [ø/Bien/Très/?*Un peu/?Peu/*Pas] naïfs sont ceux qui croient à l'astrologie.

そこで、本稿では、情意的倒置における情意性は、程度の高さに対するものと考える。また、(d) が不自然であることも、程度の高いことに対する情意的態度を表明しながら、命題を否定するのは矛盾であるからと説明される。

(d) *Naïfs ne sont pas ceux qui croient à l'astrologie.

3) 形容詞 grand についても、例えば、(a) を、(b) や (c) のように言い換えられる。

(a) Grande est mon admiration pour ce volume. ((2b) を改変)

(b) J'ai une grande admiration pour ce volume.

(c) J'admire énormément ce volume.

(b) や (c) は、私が賞賛の念を抱いていることを述べている。よって、(a) も、私の賞賛の念が大きいということを述べながら、私に賞賛の念があることを述べていると言える。そこで、grand も、主語の指示対象の量について述べながら、その存在を述べていると考えられる。

4) しかしながら、動詞が本来、存在・出現を表わすものでなくても、当該の文脈で、存在・出現を断定するために用いられていれば、関係節の外置が可能となる。

en revanche, des monstres rôdent dont la forme change avec l'histoire du savoir.

(FOUCAULT, *L'ordre du discours*, p. 35)

動詞 rôder は、"errer avec une intention suspecte ou hostile (*Le nouveau petit Robert*)" という意味である。しかし、このような行動は monstres がいかにもとりそうなものである。よって、問題の動詞は、主語の指示対象に関してあまり新しい情報をもたらしておらず、むしろ、その存在を述べていると考えられる。

5) ただし、関係節外置構文において、述語 être nombreux はあまり自然でない。

? Les lecteurs sont nombreux qui se sont rendu compte qu'il y avait un saut logique dans son argument.

これは、述語が〈繫辞＋形容詞句〉であるためと思われるが、今後の課題としたい。

6) 次の正置構文が不自然でないことから、(10b) や (12b) の不自然さは、倒置構文を否定したことに起因していることが分かる。

(a) Le train que tu as déjà pris la semaine dernière ne passera pas.

(b) Les sciences naturelles ne sont pas nées à cette époque-là.

7) しかし、主語が定の倒置文が否定できない訳ではない。(12b) は、「この時代に生まれたのは自然科学ではなく、別の科学である」という対比的な文脈では、容認可能性が向上する。また次の文は、やはり、倒置文の否定になっている。

Dans ce tableau, ne figurent pas les jeunes effectuant leur Service national

et ceux qui ne travaillent pas. (*Les clés de l'actualité* 138, p. 5)

これは、16歳から25歳までの若者の社会的身分に関する統計への但し書きである。この文は、主語の指示対象について、それが記載されているかどうかといえば、記載されていないという意味ではない。グラフに、*scolarisés, salariés, chômeurs* 等が挙がっていて、それに対して、グラフに入っていないものとしてはこれこれのものがあるという意味である。よって、否定文であっても、提示として自然になるものと考えられる。

8) GIVÓN (1976, §10), 同 (1984, Ch. 9, §9.3.) を参照されたい。

9) (16b) や (18b) を可能とするインフォーマントも存在するが、この場合は情意的倒置と解釈されていると考えられる。(16b) を不自然とするあるインフォーマントは、*encore* を補えば程度の大きさを強調することになり、自然になると述べていることは、この見方の証左となるものである。

(a) [(16) と同じ文脈] *Mais, plus dangereuse encore est l'héroïne.*

このように、文頭の属詞が比較級でも、主語の指示対象の導入とは関係なく、情意的要因

で倒置していることがありうる。属詞が重要な情報を担っている (b) も同様に考えられる。

(b) *Car si l'écriture est douce pour Gorki, dix fois plus dure fut sa vie.*
(cité dans JONARE, p. 106)

10) あるインフォーマントによると、このような結論の文脈では、*mais* ではなく、*et* とすべきであるが、いづれにしても容認度の差は存在するので、本稿の議論に影響はない。

11) LE BIDOIS (1952, p. 173) は、(a) は不自然で、(b) の方がはるかに自然だと述べている。

(a) *Césarine vit des scènes horribles ...de noyades et d'héroïques martyres; et moins héroïques ne furent pas les confesseurs*

(b) *et non moins héroïques furent...*

これは、(b) では否定が形容詞句内に埋め込まれているためと思われる。否定がより小さな要素に埋め込まれていくと、発話行為としては否定でなくなっていく (GIVÓN (1984, Ch. 9, §9.) 参照) ので、トピック・コメント構造への転換も生じなくなると考えられる。

[参考文献]

- BLINKENBERG, A. (1928): *L'ordre des mots en français moderne*, Première partie, Munksgaard, Copenhagen.
- GIVÓN, T. (1976): "On the VS Word Order in Israeli Hebrew: Pragmatics and Typological Change", in P. COLE, (ed.) *Studies in Modern Hebrew Syntax and Semantics*, North-Holland, Amsterdam, pp. 153-180.
- (1984): *Syntax: A Functional-Typological Introduction*, vol. 1, John Benjamins, Amsterdam.
- JONARE, B. (1976): *L'inversion dans la principale non-interrogative en français contemporain*, Uppsala.
- LE BIDOIS, R. (1952): *L'inversion du sujet dans la prose contemporaine (1900-1950)*, Editions d'Artrey, Paris.
- MARTIN, R. (1970): "La transformation impersonnelle", *Revue de linguistique romane* 34, pp. 377-394.
- NORDAHL (1973): "L'antéposition de l'adjectif attribut en français moderne", *Studia neophilologica* 45, pp. 115-123.
- SAVELLI, M.-J. et P. CAPPEAU (1993): "Deux paradigmes de l'attribut", *Recherches sur le français parlé* 12, pp. 59-83.
- 東郷・大木 (1987): 「非人称構文の談話機能について: 倒置構文との比較をめぐって」, 『フランス語学研究』 21, pp. 1-19.